


 研究  
報告

# ウメすす斑病に対する各種殺菌剤の防除効果と効果的な防除体系

和歌山県果樹試験場うめ研究所（現 和歌山県果樹試験場） **たけ だ とも あき**  
**武 田 知 明**

## はじめに

ウメすす斑病は、*Peltaster* sp. を病原とし、果実や枝の表面にすす症状を呈する病害である（島津ら、2007）。本病の果実への感染は主に5月上旬ころに始まり、5月下旬以降の感染で発病しやすく、感染時期にかかわらず6月上旬以降に発病する（島津・米田、2003）。県内のウメの主産地では、収穫量のうち約8割が完熟落下収穫されており、生育後期に発病する本病が問題となりやすいため、上記の感染時期を踏まえ、4月下旬以降に2週間間隔で3回、殺菌剤による防除が行われている。しかし、最終散布から収穫終了までの期間は1か月以上と長く、また梅雨と重なるため、多雨年には殺菌剤の残効が切れ、本病が多発することがある。

本病に対する登録薬剤は多いが、殺菌剤の残効性、耐雨性を同時に同一条件下で比較した事例はなく、これらの結果に基づいた効果的な防除体系は構築されていない。

そこで今回は、各種殺菌剤の防除効果を同一条件下で比較し、耐雨性や残効性に優れた数種の殺菌剤を組合せた防除体系の効果について検討するとともにパラフィン系展着剤の加用効果についても調査したので、その結果を報告する。

## I 各種殺菌剤の防除効果

2011年と2012年に表-1に示した10種類の殺菌剤の防除効果について検討した。試験は、和歌山県果樹試験場うめ研究所内の圃場植栽の品種‘南高’（2011年時点で10年生）を供試し、1区1樹3反復で行った。供試薬剤は4月下旬以降に約2週間間隔で3回散布したが、ジチアノン水和剤は、登録上の収穫前使用日数が45日と長く、使用回数が1回であることを考慮し、1回目だけの散布とし、2回目以降無散布とした。調査は、6月上旬以降に定期的に行い、1樹当たり100果（100果に満たない場合は全着果）について、指数別に発病状況を調査

し、発病果率および発病度（算出方法は表-1脚注参照）を算出した。

2011年は、最終散布日の5月25日から6月20日にかけて降水量521mm、降雨日数19日と極めて多雨に経過したため、6月21日には無散布区で発病果率87.0%、発病度47.1と甚発生条件下での試験となった。その結果、最終散布16日後の6月10日時点では、すべての剤が防除価80以上の高い効果を示した。26日後の6月21日時点でもキャプタン水和剤、ジチアノン水和剤およびジフェノコナゾール水和剤は、防除価80以上の高い効果が持続したが、これら以外の7剤は防除価67以下と効果が低下した。

2012年は少雨に経過したため、6月27日の無散布区で発病果率26.7%、発病度8.9と少発生条件下での試験となった。その結果、アゾキシストロビン水和剤を除く9剤は、最終散布30日後の6月27日時点でも防除価80以上の高い防除効果が認められた。

以上のことから、キャプタン水和剤、ジチアノン水和剤およびジフェノコナゾール水和剤は多雨、少雨条件とも安定して高い効果を示した。オキシポコナゾールフマル酸塩水和剤、ベノミル水和剤、マンゼブ水和剤、フェンブコナゾール水和剤、ピラクロストロビン・ボスカリド水和剤およびクレソキシムメチル水和剤は、上記の3剤に比べて残効性や耐雨性は劣るものの、ローテーション散布に使用するには十分な効果があると考えられた。

## II 効果的な防除体系

試験Iで残効性や耐雨性に優れた3剤のうち、登録上の収穫前使用日数が長いジチアノン水和剤を1回目、キャプタン水和剤を2回目、収穫前使用日数の短いジフェノコナゾール水和剤を最終散布（4回目）に使用する新体系を考案し、その効果について2013年と2014年に検討した（表-2）。なお3回目の防除には、ローテーション剤としてクレソキシムメチル水和剤を用いた。対照には、平成25年度和歌山県農作物病害虫および雑草防除指針の‘南高’防除暦例に記載された防除体系を用いた。希釈倍数および散布日は表-2の通りとし、供試樹およ

Effects of Several Fungicides against Sooty Blotch of Japanese apricot and an Improved Control Program. By Tomoaki TAKEDA  
(キーワード：ウメ、すす斑病、防除効果)